

Unit 3 助動詞の重要性

動詞のシステムについてもう一点追加しなければなりません。それは、助動詞の機能です。助動詞といえば、must, can, may, will, have to, ought to, would, could, might as well などが含まれます。「助動詞」という用語から受ける印象は、動詞の補助的機能といった程度の弱いものですが、実はとてつもなく重要な役割をするのが助動詞です。なぜなら、話し手の事柄に対する主観的判断を表現するのが助動詞だからです。あることを客観的事実としてそのまま伝えることはあまり多くありません。日本語の会話を観察してみるといいでしょう。「ひょっとしたら…だ」「…できないことはない」「…してもかまわない」など、話者の判断付きの陳述が行われる場合が多いことに気づくはずですが。

助動詞の基本的機能は、ある事柄についての「確率」「義務」「意図」「可能性」などを意味的に調整することです。例えば、「太郎は明日やってくる」という文に対して、「ちがいない」「かもしれない」「はずだ」などの助動詞を使うことによって話し手の事柄に対する判断を示します。

確率は確かさの尺度であり、must be は強く、may be はそれより弱い。義務(必要性)と意図は相互に関連していることが多く、〈必要性があり、断固としてやる気〉であれば I must do it. と must が選択され、〈やってもやらなくてもよいが、気持ちとしてはかなりやる気〉なら I may do it. と may を選択します。I will do it. となると〈気持ちとしてやる気がある〉というニュアンスを読み取ることができます。

can / be able to

助動詞は話し手の態度を表すのになくしてはならないものです。I do it. だと「私はそれをする」という何の変哲もない表現ですが、I can do it. といえば「やろうと思えば可能だ」という意味になります。

can は「できる」という意味で「能力」を表すとたいていの人は考えています。しかし、それは正確ではありません。「窓を開けてもらえますか」といいたい状況で Can you please open the window? と表現しますが、このcan は相手の能力を問うているわけではありません。can の意味のコアは「実現可能性」として表現することができます。つまり、Can you please open the window? は、相手に「窓を開けることが可能か」と問うており、You can go home now. は「帰宅することが可能だ」と伝えている状況です。Bolt can run as fast as an elephant. (ボルトは象と同じぐらい早く走ることができる) は、走者としての「能力」を表現していますが、これも「走ろうと思えば走ることができる」という意味において行為の可能性と考えることができます。状況の実現可能性ということもあり、例えば、Watching TV all day long can be boring. はその例です。つまり、「一日中テレビを見るっていうのは退屈しちゃう可能性がある」

ということです。これは何かある状況をthat で指して、否定形で、That can't be true. (そんなの本当であるはずがない) といった具合に使われます。

一方、be able to の able は more able と比較級にすることができるように形容詞です。その名詞形は ability であるようにズバリ「能力」を表します。そこで、be able to と can の違いをズバリ説明すれば以下のようになります。

★ can は「やろうと思えばできる（実現する可能性がある）」

★ be able to は「実際にできる（能力が備わっている）」

このふたつの違いは、過去形にすると歴然とします。

I was able to talk to her.

(彼女と実際に話すことができた)

I could talk to her.

(彼女と[話そうと思えば]話すことが可能であった)

最初の例では「実際に話した」ということが、ふたつ目の例では「実際には話さなかった」ということが含意されます。

義務と必要性 : *have to / must / need to*

「～しなければならない」に相当する英語の助動詞はいくつかあります。代表的なものとして must、have to、need to をあげることができます。また、have to との関連でいうと (have) got to も出てきます。

「あることに対して抗いがたい力がはたらき、どうしても～しなければならない」「他に選択肢がない」という非常に強い意味合いがあります。Now, we really must get back to work. は、「もうぐずぐずしないでなんとしても仕事に戻らなければならない」という強い気持ちが表れています。

have to は「これからする行為 (to do)」を have しているということから、「何かをする状況を抱えているため、それをしなければならない」という意味合いになります。must は選択の余地がないという状況ですが、have to だと「何かをする状況を抱えている」ということから、いわば、外的な要請があるという含みになります。映画に誘われて、I really have to finish writing this report by tomorrow morning. とはいえ「あす朝までにこの報告書を書かなくてはならないんだ」ということですが、上司から期日を決め

られており、「しかたないんだ」といった状況を想像することができます。don't have to は「～する必要がない」ですが、must not (musn't) になると「～しては絶対いけない」という意味になります。I must go. だと「行く以外、他に選択肢がない」ということで、I have to go. だと「この場を離れるという状況を抱えている」といった感じです。そこで、「本当は行かなくてはいけないけど、しばらくここに留まることにする」という状況だと I really have to go, but I will stay here for a while. は可能ですが、I really must go, but I will stay here for a while. は論理的に矛盾してしまいます。

need to だと「何かをすることに対して必要性がある」という意味合いになります。I think I need to go to the bathroom. だと「トイレに行く必要がある、ニーズがある」といった感じです。have to が外からの要請(状況や相手の命令)であるのに対して、need to だと、話し手が心の中である理由から何かをする必要があると感じている意味合いがあります。

会話の潤滑油としての助動詞: *would, could, should, might*

このように、助動詞は話者のある事柄に対する判断を表現するというのが主要な機能ですが、コミュニケーションの潤滑油としての機能も見逃せません。人との関わりの中では、ずばり言い切ることのできない状況や、自分の発言を押しつけない代わりに、その発言の責任もあまり取りたくないという状況などが多くあります。こういう場合、主張を弱める機能を持った *would, could, should, might* が利用されます。たとえば、下の会話で使われている助動詞には断定を避け、遠まわしに表現するという効果が見られます。

A: Where would be a good place to meet?

(どこであえばいいかしら?)

B: There's, uh, there's a big statue near the theater. We could meet there at about seven.

(えっと、その劇場の近くに大きな像があるんだけど、そこで7時ごろでいいんじゃないかな)

つまり、この様な助動詞の使い方は、コミュニケーションにおいて「丁寧さ」を増す機能を持つものです。

would, could, should, might は会話英語の特徴を知る上で特に大切であり、以下では、それぞれについて意味的特徴を見ていきましょう。

まず、*would* についていえば、'd の省略形で用いられるのがふつうですが、意味的な特徴としては、大きく二つに分かれます。その一つは下の例のように *would like to* (～したい)の意で使われる場合です。

I'd like you to come down to the studio and put together a demo tape. I've got some friends who would probably like to have a look at you.

(あなたにスタジオまで降りてきてデモテープをまとめて欲しいんだ。君にちょっと会いたいという友達が何人かきているしね)

would like to の使用方法としては、ご存知のように、I'd like to do it.(私はそうしたい)と I'd like you to do it.(私はあなたにそうしてほしい)の2通りがあります。さらに、would は断定を避け、丁寧に〈～だろう〉のニュアンスを伝える意味で使われます。

How would you feel about the band with a different lineup, with you as lead singer?

(ちょっと違ったラインアップで、あなたがリードシンガーを務めると言うのはどうだろうか)

今度は could の意味的特徴を見てみましょう。could は2通りの意味で使われることが多くあります。そのひとつは、「あることが可能性としては起こりうる」というニュアンスにおいてです。

I like them, they could be good for us...and you could have a goldmine on your hands.

(彼らのことを気に入っているよ。僕たちに良くしてくるってこともあるしね。...富の源を手に入れるということになるかもしれないよ)

can ほど現実性の高い可能性ではなく、あることが起こりうることを否定しない(起こったとしてもおかしくない)といった程度の可能性が could によって表されます。

could のもうひとつの意味として〈丁寧な依頼〉のニュアンスを伝えます。下の例のように、Could you just...?, Could you please...? の形が人にあることを丁寧に頼むときの決まり文句です。

Mr. Buckman, most of this contract looks great but could you just explain the section under management?

(バックマンさん、この契約は基本的にはよろしんですが、マネージメントの箇所をちょっと説明してもらえますか)

would you please...? も依頼表現として同様に使われますが、頻度から見ると could の方が多いみたいです。

次に、should と might の用法を見てみましょう。

We've always written good songs and I think we should have the choice over our own material.

(我々はいつでもよい曲を書いてきたし、自分達が何をやるかについての選択は我々でやってもいいはずだよ)

should は日本語では「～すべき」と訳されることが多くありますが、must ほど強くなく、「～するのが筋だ」「～のはずだ」「ぜひ～してごらん」ぐらいの意味で使われます。また、下のやりとりのような使い方もします。

A: Are you nervous, Michael?

(マイケル、緊張しているかい)

B: Sure, Why should I be? I've got you out here with me.

(もちろんさ。でもおかしいね。君と一緒にいてくれるのにね)

「緊張している？」と聞かれて、「しているけど、そんなのおかしいよね」と答える場面で、should がつかわれています。why should I be?は「緊張していることは筋に合わない」というニュアンスです。

次の例は、might の典型的な使われ方です。

Hey, Michael, I thought I might find you here, did you see Jimmy on TV last night?

(おい、マイケル、ここにすれば君に会えると思って。昨夜ジミーをテレビで見たかい)

With a few more days, I might be able to reach him.

(もう2・3日あれば彼の気持ちをつかむことができるかもしれない)

「ひょっとして～」のニュアンスが強いのが might です。might be able to は「可能性は低いかもしれないけど、もしかして」という気持ちが伝わります。

ちなみに、could, would, should, might はすべてあることが起こりうる可能性を示す機能を持ちますが、その度合いについて、数名のネイティブスピーカーに尋ねたところ、It should happen.>It would happen.>It could happen.>It might happen.の順になりました。

動詞を使った慣用表現

助動詞表現の中にも次のように熟語化したものが多くあり、以下は押さえておきたい表現です。

might well (...も十分にありうる)

There might well be truth in his statements.

(彼の申し立てにも真実が十分にある)

might as well (しかたないから...したほうがいいんじゃない)

We might as well agree now; we will be forced to.

(ここらで同意した方が良さそうだ。結局、むりにでもそうさせられるんだから)

might as well ... as (...するくらいなら...したほうがまだ)

We might as well walk home as try to catch a taxi here.

(ここでタクシーをつかまえようとするくらいなら、家まで歩いたほうがまだ。)

had better (...するほうがよい; ~しないとまずいことになる)

You'd better check with the authorities first thing in the morning.

(朝一番で当局に確認してみた方がよい)

used to (今はしていないが...したものだ)

I used to be a dancer before I broke my ankle.

(足首を折るまでは私はダンサーだった)

ought to (...してごらん/...するほうがいいよ)

You really ought to go to the doctor now.

(すぐ医者に行ってみる方がいいよ)

would like to (...したい)

I would like to thank you for a lovely meal.

(素敵なお食事に感謝いたします)

would rather (むしろ...したい)

I would rather be a lawyer than a banker.

(銀行マンよりは弁護士でありたい)

助動詞をうまく使うと、表現がかなり豊かになるはずです。日本語の「...した方がよい」に相当する英語として **had better** が定着しています。日本語の表現は割と誰にでもよく使われますが、**had better** は親しい間柄でないと強すぎることは知っておきたいところです。何かを勧めるときには **ought to**, **should** (ぜひ...してごらんなさい)がよいといえます。